

# 太平洋戦争か大東亜戦争か

平 川 祐 弘

(東京大学名誉教授)

## 国家基本問題研究所にとっての一大主題

国家基本問題研究所の関係者にとってファンダメンタルな歴史観は、どのような見方なのだろうか。個々人別様の歴史観があるに相違ないが、それでも同志とはいわずとも同人として、広い幅はあるにせよ、この会員には共通する見方があるにちがいない。

その種の主題の例として思いつくまに述べると、たとえば、メンバーの間には、幕末明治以来の我が国の近代化についてはそれを肯定的に見る歴史観がわかちもたれているのではあるまいか。日露戦争に至る日本の歩みを「坂の

上の雲」を目指して進んだ国の歩みとしてポジティブに捉えることに異存は少ないであろう。ペリーの黒船来航からの半世紀の日本史については、それを良しとする見方が会員の主流であろう。

それに対し、一九〇四―五年の日露戦争以後の半世紀の歴史については、とくに日本が戦って敗れた第二次世界大戦については、共通して一致する見方が日本人の中にあるとはいいがたい。負の歴史として見る人も多いのではあるまいか。ただし自虐的な日本悪者史観に対しては同意しない国基研メンバーは多いに違いない。そもそも歴史観を反映するその戦争の呼び名について共通の呼び方があるのか、ないのか、一瞥してみよう。

## 呼び名は戦争の性格を反映する

近ごろ、昭和の大戦について、太平洋戦争ではなく大東亜戦争と呼べ、という主張が研究所のたよりに、関係者がしばしば執筆する『産経新聞』にも、散見する。表現は自由である。ただしだからと言って、使っていいのかわ、悪いのか。賛成の人もいれば、反対の人もおられよう。

戦争の呼び名は戦争の性格を反映する。また逆に国基研の人々が昭和の大戦をどう呼ぶかは、この研究所の性格がいかなるものであるかを示す座標ともなりうる。櫻井よしこ理事長は田久保忠衛副理事長への弔辞（『国基研だより』令和六年二月号掲載）で、田久保氏との「常に大きな話題の一つが大東亜戦争の評価でした」と述べている。

実は私自身は田久保氏に誘われて創立直後の国家基本問題研究所に理事の一人として加わった。そのころ田久保氏はいきなり私に話しかけた。それは昭和の大戦についての評価であり、その際、氏は徳富蘇峰の歴史観に依拠して私を説得しようとした。氏がややもすれば義戦の面を強調しようとするのに対し私が否定的であったからである。この

小論文《太平洋戦争か大東亜戦争か》ではその問題点にふれることにしたい。

## 大東亜戦争という名称

大東亜戦争の名称について賛成派には、昭和十六年十二月十二日の閣議決定で、今度の対米英戦争は、従来の日支事変を含めて大東亜戦争と呼ぶ、と決定されたからだ、と法学的な主張をする方もいる。当時は戦局の推移にともない新地名が作られた。昭和十七年二月十五日にシンガポールが陥落するや、十八日には戦捷第一次祝賀国民大会が開かれた。私事を語ると、私は東京の少国民を代表して皇軍への感謝の放送をした。そのとき内幸町にあった放送局まで同伴された田中豊太郎先生が、放送直前に原稿に「シンガポールは名前もいまや昭南島と改め」と加筆した。小学四年生の私がそれを朗読した。いまも私は昭南の名を鮮明に記憶しているが、憶えている人は少なからう。まして戦争当初のわが軍がいち早く占領したグアム島を大宮島と呼んだことなどは、政府決定であろうと、誰も覚えているまい。

では逆に昭和二十年十二月十五日、占領軍は日本人が「大東亜戦争」という言葉を口にするのを禁止し「太平洋戦争」と呼び、そう印刷するよう厳命した。だが連合軍の指令だからといって、それを歴史判断の基準として信奉するのか。日本の放送新聞はその時の決定を順守し、それを守らない者は反動扱いにされたが、私たちはいつまでそれに惰性的に従うべきなのか。それはアメリカ側で the Pacific War とか War in Pacific と呼ぶから日本人に「太平洋戦争」と呼ばただけではない。「大東亜戦争」といわせておくと、日本が大東亜解放のために戦った、という義戦の面が歴史に残る。それを日本国民の脳裏から消し去ろうとしたのである<sup>1</sup>。

### 歴史を複眼で見る

第二次大戦で日本が戦ったのは「太平洋戦争」だけなのか。「大東亜戦争」の側面は皆無<sup>かひ</sup>なのか。その問題を問いたく思い、一九九一年度、比較文学比較文化課程大学院で私は「文学に現れた太平洋戦争と大東亜戦争」と題する最後の授業を一年間行なった。やや異質な主題だったが、東

京大学の一主任として最後の学年度である。すると一種の知的責任感を覚えたのである。作品の質の如何は問わず、先の大戦に関係する日本文も英文も、時には中国文もとりあげた。出席学生も半ばは日本人、半ばはかつて敵対した国々の出身者で、二十数名の教室は満員だった。そうした大学院生たちを相手に一年「戦場に架ける橋」、『ピルマの竖琴』、硫黄島で戦死した市丸利之助海軍中將の『米国大統領への手紙』や重慶爆撃に触れた豊子愷などをとりあげたのである。その成果はまず日本語で発表した<sup>2</sup>が、英語で Sukehiro Hirakawa, *Japan's Love-Hate Relationship with the West, Global Oriental/Brill* に発表した。特定の国だけが正しい、と夜郎自大に言い張ることはしかなかった。また日本だけが悪いと謝る自虐史観に従うことも無かった<sup>2</sup>。

### 戦後レジーム脱却とは何か

そのような歴史の再吟味は、後から考えると、安倍晋三氏が唱えた日本の「戦後レジームからの脱却」の試みと重なるものでもあったろう。安倍内閣が成立して「戦後レジ

ームからの脱却」が公然と唱えられると、外国特派員の中には旧軍国主義の復活かと疑心暗鬼で批判する者もいた。しかし戦後体制や戦後思想体制のゆがみが露骨になり、その仕切り直しを政府に求める層は日本にかなり多くなつた。その人々がいたからこそ安倍政権は安定的に続いたのである。

ここであらかじめ言っておきたい事は、「勝者の裁判」である東京裁判の検察官が主張した歴史観を受け付けないという私である。そのような平川を右翼反動と決めつける方もあるいは居られるかもしれない。しかし私の主張に同調しない読者も、次のような文章が仮に大学入試に出題されたら何と答えるだろうか。

- a 第二次世界大戦に際して日本のA級戦犯を含む極めて少数の人間が自己の個人的意志を人類に押しつけようとした。
- b 日本のA級戦犯は文明に対して宣戦を布告した。
- c 彼らは民主主義とその本質的基礎、すなわち人格の自由と尊重を破壊せんと決意した。
- d 彼らは人民による人民のための人民の政治は根絶さ

るべきで彼らのいわゆる「新秩序」が確立されるべきだと決意した。

e 彼らはヒトラー一派と手を握った。

これは連合国側を代表して東京裁判の冒頭でキナン首席検察官が述べた主張だが、確実に○がつく解答は日本の指導者が「ヒトラー一派と手を握った」ことだけだろう。私は昭和日本の最大の失策はヒトラー・ドイツと同盟を結んだこととと思っている。

右の冒頭陳述に示された様な史観は正確でもなければ正義でもない、ただし私がそう弁明したからと言って、日本軍部が主導した当時の日本が正しかったと言うつもりはない。私の歴史評価は当時も今も同じである。軍部が日本の中央政府に従わず、解決の目途も立たぬまま中国で戦線を拡大した責任は大きい、また軍部に追隨した新聞も悪い。ただし先の大戦でかりに軍国日本が悪玉だったとしても、一九四五年八月六日の原爆投下によって善悪の立場は逆転した、——私はそう判定している。

## 正々堂々と歴史の修正を

第二次世界大戦をデモクラシー対ファシズムの正義の戦争だった、と一時期内外の左翼の歴史学者は主張した。日本で都留重人などそう主張したが、しかし米国と組んで日本と戦ったソ連や中国が人格の自由を尊重するデモクラシーといえるのか。

私見では日本は反帝国主義的帝国主義の国だったが、その戦争に正面の「太平洋戦争」とともに「大東亜戦争」の側面があったことは否定できない。日本が英国と戦った香港・マレー半島・シンガポール・ビルマやインド洋は地理的にも太平洋とは呼べないからである。

日本の皇室と親しいオランダの皇室は、かつて女王が日本軍の蘭領東インド占領の四年の非道を口にしたことがあったが、日本の皇室に政治的発言は許されない。オランダのインドネシア占領の四百年の非道について反論も質疑もなかった。しかし近年、両陛下がインドネシアを訪問、脱植民地のためインドネシア将兵と共に戦って戦死した日本人将兵の墓に参り、現地の遺族を慰められた。昭和の大戦

には太平洋戦争という面だけでなく大東亜戦争という面があることは今や公的にも認知された、と言ってよいであろう。先にベトナムご訪問の際もインドシナで独立のために戦って戦死した日本人将兵の墓に参り、現地の遺族を慰められたからである。

## 各国の歴史と歴史観の栄枯盛衰

ここで各国の歴史とともに歴史観の栄枯盛衰を一瞥したい。

私はシナ事変（日中戦争）が勃発した頃、幼稚園に入った。「日英米独仏伊露中」の順で世界の国名を習った。日本は別とし、世界一は大英帝国で、明治以来、海軍も官庁も銀行も、英才を英国に派遣した。中学でも King's English を習い、スペリングは英国式だった。帝国大学も英文学は教えたが、米文学は教えない。そんなであっただけに、昭和十六年十二月八日、「米英二宣戦ヲ布告」と聞いて「英米」の順がひっくり返ったと驚いた。

第二次大戦後、ソ連は世界第二の超大国として米国と張りあったが、社会主義体制の崩壊で転落、その経済的実力

今は韓国より下といわれるが本当か。ソ連の衰退は、それが依拠した唯物史観の衰退となったが、同じく人民民主主義を奉ずる中国は、国家資本主義に転じ、世界第二にのしあがった。中国流プロレタリア独裁とは党員富裕層の独裁か。

日本の歴史観はどうだったか。米国で苦勞して帰国後外交評論家としても活躍した清沢冽きよさわ りつは『戦争日記』で昭和十八年五月、日本の歴史学について「左翼主義はそれでも研究をした。歴史研究にしても未踏の地に入れた。唯物史観の立場から。しかるに右翼に至ては全く何らの研究もない。彼らは世界文化に一物をも加えない」と酷評した。

### 羽仁五郎の唯物史観と平泉澄の皇国史観

清沢が『戦争日記』で思い浮かべたにちがいない歴史学者は、その口吻から察するに、左は羽仁五郎、右は平泉澄だったのだろう。唯物史観の優位を説き、明治維新を論じ、日本資本主義発達史講座の刊行に尽力した羽仁の方が、軍関係などの学校で連日、万邦無比の日本を讃える講演をした平泉東大教授よりもまじめな研究をしていると清沢は見た

のだろう。私は敗戦後に大学で学んだが、当時の学内外の雰囲気には押されて、右翼の国粹主義的歴史観はもはや読まなかった。だが「階級史観を奉ぜぬ者は学者に非ず」といわんばかりの高圧的な左翼の権威主義も嫌いだ。英国の日本史家ジョージ・サンソムを読んだとき、その自由で暢達な文体にほっとして、比較文化史を目指すなら私が進むべき道はここにあると思った。

戦後、日本の歴史学会を支配した左翼教授も、拗よつて立つイデオロギー的基盤が一九八九年、ベルリンの壁と共に崩壊するや、意気消沈した。すると反左翼自由主義の威勢があがる。人民中国の偽善の皮が剥はげ、監視国家の正体がすけて見える。連合国製の歴史観が戦後日本では喧伝けんでんされたが、そんな日本悪者史観をいまなお言い立てる国が、習近平の中国と文在寅の韓国左翼なものだから、そんな東京裁判史観こそ怪しいと日本人が思い始めた。健康な反応だと思う。日本の悪口を言う以外に言論の自由のない国に、公正な歴史観が期待できるはずもない。

## 賛否両論の蘇峰流歴史観

だがここで注意したい。左翼史観が没落したからといって、戦前戦中にもてはやされた、たとえば徳富蘇峰流の歴史観が正しかった、といえるのか。

英国の小説家で詩人、ラドヤード・キプリングは白人の植民地事業を肯定し、西洋人は「白人の重荷」を担う、と主張した。すると蘇峰は、それは余計なお世話だと反撥し、日本は東亜の盟主として「黄人の重荷」を担う、と主張した。だが中国人、朝鮮人の側からすれば、それもまた余計なお世話だったのではないか。しかし日本人は、蘇峰流の白閥打破の主張に歓呼した。開戦一年、歌舞伎座で開かれた陸軍に感謝する会は超満員。その日、蘇峰こそ大東亜戦争を勃発させるに最も力のあつた言論人だと清沢は書いたが、その筆は苦々しげである。蘇峰が戦後も書き続けた『近世日本国民史』百巻には私も敬意を表するが、その戦争観には疑問をもつ。ここでは次の点を取り上げて批判に代える。

賛否両論のある蘇峰だが、『徳富蘇峰終戦後日記』に対

する諸家の反応は興味深い。八月十九日、蘇峰は四日前の鈴木貫太郎総理の終戦工作成就を「敗戦迎合」と罵倒した。これには小堀桂一郎東大名学教授も同調しかねている。<sup>8)</sup>

### 史観が国家興亡に追いつかず

私はこの目で軍国日本の壊滅、経済大国の復活を見た。だがそのエコノミック・アニマルも高齢化した。国家の興亡がかくも激しいと、歴史を説明する史観の方が追いつかない。皇国史観もマルクス史観も破産した。羽仁の亜流のカナダの外交官、E・H・ノーマンもそのまた亜流のダワー以下のキャンパス・レフトもお蔵入りだ。

空騒ぎに類する皇紀二千六百年を寿いだ翌年、日本は勝ち目のない戦争に突入した。イラン建国四千年を祝賀したパルレビは翌一九七九年、国王の座を追われた。中華民族五千年の文明を鼓吹して登場した習近平は、一身に権力を掌握、蔭で習皇帝と呼ばれている。近ごろ盛装して公式舞台にも登場するようになった歌手であり軍人である夫人は第二の江青と呼ばれている。

思い出されるのは、辛亥革命で中華民国初代総統となっ

た袁世凱えんせいがいの運命だ。袁は権力を握るや近代化革命の産物である民主法制を廃止、国民代表に工作することによって満票で皇帝に推戴すいたいされた（一九一五年）。だが帝政は続かず、四面楚歌しめんそかのうちに病没した。その死ほど人々に歓迎された死はないと中国の新聞は報じている。歴史の次の転換点は、在外華人が声をあげて皇帝統治反対を唱え出す時であるろう。

### 安倍首相の『戦後七十年談話』

安倍首相の『戦後七十年談話』は多くの日本人の賛成を得たが、反対する人もいる。「『戦後七十年談話』は日本人がこれから先、何度も丁寧に読むに値する文献だ」と私見を述べたら、「どの程度重要か」と問い返されたから「明治以来の公的文献で『五箇条の御誓文』には及ばぬが『終戦ノ詔勅』と並べて読むがよい。これから先、日本の高校・大学の試験に日英両文とも出題される日が来るだろう」と答えた。「『教育勅語』と比べてどうか」と尋ねるから「文体の質が違うが、これからの必読文献は『戦後七十年談話』の方だ」と答えた。すると早速講義するようある大学に招

かれた。そこでこんな個人的体験をまじえて話すことにした。安倍談話は歴史への言及で始まる。

「……百年以上前の世界には、西洋諸国を中心とした国々の広大な植民地が、広がっていました。圧倒的な技術優位を背景に、植民地支配の波は、十九世紀、アジアにも押し寄せました。その危機感が、日本にとって、近代化の原動力となったことは、間違いありません。アジアで最初に立憲政治を打ち立て、独立を守り抜きました。日露戦争は、植民地支配のもとにあった、多くのアジアやアフリカの人々を勇気づけました」

### 日露戦争をどう見るか

これからの若者にはこれが共通知識となるだろう。もっともロシア側の見方は異なる。林達夫が調べたように、レニンレニンは日露戦争に際し日本の正義を支持したが、スターリンスターリンはそれとは逆の歴史観を述べた。昭和二十年、戦争に負けるや日本は悪い国だと私たちは教育された。占領軍の手で新聞ラジオを通して宣伝というか洗脳が行なわれた。それで明治以来の日本の進路がすべて悪と化した。地方の

村では大山巖陸軍総司令官が揮毫した忠魂碑を取壊すような真似はしなかったが、私に通った小学校の講堂からは東郷平八郎の書も乃木希典の書も撤去された。日本人の変わりざまは早かった。昭和二十三年、東大教養学部の前身の駒場の一高で「大東亜戦争やシナ事変を戦った日本が悪かったからと言って日露戦争まで悪かったのでしょうか」と全寮晩餐会の席で発言した卒業生がいた。それは当時としては言っただけではないタブーにふれた発言なものだから、拍手したのは私ほか少数で、数百人の一高生がしーんとしている。私ははなはだ間が悪かった。彼は「私は酔っております」と断わりを入れて降壇した。

しかしその頃の私は夜な夜な「胸に義憤の浪湛へ 腰に自由の太刀佩きて 我等起たたずば東洋の 傾く悲運を如何にせむ 出でずば亡ぶ人道の 此世に絶ゆるを如何にせん」と寮歌を大声でうたった。一方的な日本の歴史の断罪は宜しくないと言う気持が寮歌を歌わせ、十六歳の私は日露戦争前夜の日本青年のナシヨナリズムを追体験していたのである。そんな気持は戦中派には底流していた。それだから日本人は千九百六十年代になるや島田謹二『ロシヤにおける廣瀬武夫』や司馬遼太郎『坂の上の雲』を愛読した

のである。それは若き日の和辻哲郎や柳田国男が「黄禍」は「白禍」であると言ったアナトール・フランスに共感したと同じようなものだったろう。私が日本フランス文学会で最初に発表したのも日露戦争に際してのアナトール・フランスの発言についてであった。

### 満洲事変

『安倍談話』をめぐって保守派論客の意見が分かれるのは満洲事変の評価だが、談話は、持てる国と持たざる国との対立の中で、

日本は、孤立感を深め、外交的、経済的な行き詰まりを、力の行使によって解決しよう試みしました。国内の政治システムは、その歯止めたりえなかった。……満洲事変、そして国際聯盟からの脱退、……そして七十年前、日本は、敗戦しました。

と述べた。私はこれはバランスの取れた、自己反省を含む歴史評価と考える。満洲事変は軍事的には成功したが、

国際的には日本の孤立を招いたのである。中央からの命令でなく関東軍の板垣征四郎、石原莞爾らの幕僚が満洲で事変を起し、うまくいった。その際、勝手に軍を動かした者を中央は処罰せず功績として認めた。敗戦後、獄中でトイレット・ペーパーに書き記した回想録で今村均大將はこう評している。

之を眼の前に見た中央三官衛<sup>かんが</sup>及各軍の幕僚たちは「上の者の統制などに服することは、第二義的のものようだ。軍人の第一義は大功を収めることにある。功さえたてれば、どんな下剋上の行動を冒しても、やがて之は賞され、それらを拘制しようとした上官は追ひ払われ、統制不服従者が、之にとつてかわつて統制者になり得るものだ」というような気分を感じしめられた。

『今村均回顧録』は昭和日本のもつとも優れた自伝の一冊である。

## シンガポールにおける日本イメージの変遷

ここでシンガポールにおける日本イメージの変遷<sup>へんせん</sup>について個人的体験に基づいて記してみたい。私はシンガポールには過去六十年間に何度も立ち寄った。留学生を載せたフランス船が最初寄港した一九五四年当時はまだ英領だった。

何度もシンガポールに行くうちに歴史の判断が落ち着くべきところに落ち着くのが感じられた。以前は歴史博物館（今はセントーサ島にある）では歴史解釈も旧宗主国の英国の立場をそのまま反映して、第二次世界大戦で日本軍が降伏した場面の写真のみが大きく掲げられていた。独立した後、私はシンガポール大学へ招かれて外部試験官として論文審査に何度も関係した。華人系の学生で日本語の力が弱い人ほど第二次大戦中の日本を決まり文句で断罪する傾向があった。

ところがそれがいつからか。一九四二年二月、シンガポール島に敵前上陸した山下奉文中将がイギリスのパーシヴァル司令官に降伏を迫ったという歴史的な会談を描いた宮本三郎画伯の絵の大きな複製も展示されるようになった。

そればかりではない、大東亜戦争に至る遠因が「日本撃敗了俄羅斯、這是有史以來一個亞洲國家第一次擊敗了一個西方國家」と書いてある。俄羅斯とはロシアのことで、「日本はロシアを日露戦争で撃破した。これは有史以来アジアの一国が初めて西洋の一国を負かしたのである」という説明である。大英帝国のクラウン・コロニーから独立したシンガポールであればこそ、西洋植民地支配とそれに対決したアジアの反撃の歴史を説明する必要があるからで、それで反日的感情が強いといわれるシンガポールですらも日本が二十世紀前半に果たした歴史的役割に言及したのである。

そこにはさらにこんなオーストラリア兵士の感想も大きな活字で出てきた。‘After Singapore, Asia changed. For the British it would never be the same again.’

「シンガポール陥落以後、アジアは変わった。英国人にとってはおもはや戦前と同じではあり得ない」。チャーチルは大英帝国維持のために戦ったが、結局はアジアの植民地は手放さざるを得なかった。<sup>10</sup>

## 反帝国主義的帝国主義の国日本

ところでシンガポールが陥落した時は、朝鮮半島でも台湾でも万歳を叫んで小躍りした人はかなりいたらしい。しかし正直に打明けた人のお名前をいまここに記せば、韓国に住む御子孫にきつと迷惑が及ぶだろう。そのあたりが言論の自由な台湾と違う韓国の不幸なところである。しかし台湾とても大陸に併呑されたなら、さらに大迷惑が及ぶに違いない。

日本は西洋の帝国主義的進出に張り合おうとするうちに自分自身が帝国主義国家になってしまった。私はそう考える。日本側のいわゆる大東亜戦争は、反帝国主義的帝国主義の戦争だったのでないだろうか。日本のコロニアリズムにもよるしくない面があったが、西洋植民地主義にも良くなかった面があった。謝罪するならばその両面をきちんと見据えてからにしてみらいたい。その点、日本の内閣や政府高官が過去の戦争について発表した「談話」には一面的でバランスを失したものが多かった。<sup>11</sup>

そもそも日本の外務省内部では、歴史の二面性にふれて

外国語で挨拶するための修辭の訓練を全然行なっていない。恐るべき懈怠<sup>けたい</sup>であり、そのことを私は遺憾に思っている。外国語で自己表現がきちんとできない外交官ほど相手の言い分に相槌<sup>あいつち</sup>をうちやすい。私自身はシンガポールで一九九一年五月三日国際シンポジウムの閉会の辞に、夏目漱石のシンガポール見聞にふれて、こう述べた。

Generally speaking, Japanese travelers one hundred years ago had ambivalent attitudes towards the state of Singapore. They admired Britain for its achievements as a colonial power, but at the same time they resented British expansion in Asia because the positions held by Orientals were extremely low. However, very fortunately for us all, that era of Western colonialism as well as that era of Japanese imperialism is over. During our lifetime we have witnessed the death of empires, and we are now witnessing the most miraculous emergence of Singapore as a prosperous nation.

「一般的に申しますと、いまから百年ほど前の日本の旅行者がシンガポールの状態に対して抱いた気持はアンビヴァレントなものでした。日本人は一面では大英帝国の偉業に感嘆しましたが、同時に反面ではイギリスのアジア進出に対し鬱屈した感情も抱いておりました。それは英植民地における東洋人たちの地位がいかにも低く抑えられていたからであります。だが私ども全員にとつてたいへん仕合せなことに、西洋植民地主義の時代も終わりました。日本帝国主義の時代も去りました。私どもはその生涯の間に次々と帝国が死滅するのを目撃したのであります。そして私どもがいま目撃しつつあるのはシンガポールが繁栄する国家としていまここに現出しているこの奇跡的事実であります」

会議にはかつての交戦国の人も、シンガポールの人も、旧植民地の人も出席していたが、右のような平川挨拶に異存はなかった。ただし論文集編集者である台湾の学者Lien Lien-hsiang 教授の「シンガポールが陥落した時は台湾で子供の私は万歳を叫んで小躍りした」という発言を記した私の英文は、三年後一冊の書物になる際に、出版元のシン

ガポール国立大学の手で消されてしまった。「私の英文はチェックせねばならぬほど下手だったかね」と寄稿者の英文をチェックしたインド系の英文学教授に笑いながら尋ねたら「ポリテイカル・チェックです」と正直に答えた。

### スターリンよりも多くの自国民を死なせた偉大な指導者

そんな私は六十歳の定年で東大駒場を去ってから三十三年になる。その昔大学で教えた学生もまた多く定年を迎えた。私はそんな老骨だが、年配の男女でも賛否両論、議論に花が咲く。熱烈に安倍を嫌う人は、本人か配偶者に学校につとめる人が多かった。『朝日』は「この談話は出す必要がなかった。いや、出すべきではなかった」と八月十五日の社説に書いたのだから、そんな新聞を半世紀以上読んできた夫婦が安倍反対を口にするのは当然だろう。しかし周辺の名誉教授連は『朝日』があれだけけちをつけるのだから安倍談話はきつといいのだろう」とシニカルな口を利いている。ただ皆さんお利口さんで、私のようにはっきりと意見を活字にしない。

私は心中で感じたことをすぐ口にする。口にするばかり

かこのように書いてしまう。すると意外やそんな私に賛同の意を表する元女子学生がいたりする。本人がたとい教師でも配偶者が官僚や商社とかで外国も長く社交も広いと、「日本人に生まれて、まあよかった」と皆さん思っらしい。そこは大新聞中毒となった人たちの井の中の大合唱と違って話が面白い。そんな悪態をつく私に元朝日の記者が賛成の手紙をよこしたりする。

そこで私は外国人研究員に質問する。「皆さんは慰安婦報道で大きく躓いた朝日新聞の謎を解けないようでは第一級の日本研究者とは言えませんよ」。中国留学生にも質問する。「談話にアジアで最初に立憲政治を打ち立て、とありましたが次の年に何があったか。一七八九、一八八九、一九八九」。答えは「フランス革命、大日本帝国憲法発布、天安門事件」だが、一九八九年についてはベルリンの壁崩壊、も正解ということにしてある。そして二〇八九年に天安門広場にスターリンよりも多くの自国民を死に追いやった偉大なる指導者の胸像はなお懸っているだろうか、とひそひそ話をして教室を去るのである。

## 田久保忠衛氏の知遇

私は戦後いちはやく（というのには昭和二十年代のうちに、という意味である）渡欧する機会を得た、当時は新聞記事にその名前が出るほど数が少なかった留学生である。しかも私は長く仏独墮英伊に留学した。それで西洋なれしていたからだろう、そんなに英語ができるわけではないが、一九七七年、ワシントンのウッドロー・ウィルソン・センターへ招かれ、フェローとして精勤した。ナシヨナリズムの研究部会で私が発表した《Chinese Culture and Japanese Identity: Traces of Bai Ju-yi in a peripheral country》はかねて日本語で発表した《漢文化と日本人のアイデンティティー——白楽天の受容を通して》の英訳だが評判となった。学年度末のハーンについての発表も反響があった。

そんな私は気が付かなかったが、時事通信社外信部長もつとめワシントン勤務だった田久保さんはその頃からウィルソン・センターに出入りしていたらしい。私の噂を受付のフラ・ハンターから聞いて驚くほど詳しくかった。彼女

は私に好意を抱いていたから、田久保さんに良き平川像を伝えたのだろう。それもあつて後年、国基研が創設された時、田久保副理事長は私に参加するよう声をかけてくれたのだと察する<sup>12</sup>。

田久保氏は新聞人から大学人に転じ、杏林大学でも精勤した。立派な風貌の氏は国際シンポジウムの席でも、櫻井理事長と共に氏が壇上にいると様になった。問題が頭の中できちんと整理されていたから、話によどみない。そうした公式の場での話も聞かせたが、新学而会などでのシェリー酒を飲んでの内輪の会話も面白かった。<sup>13</sup>

田久保氏は愛国心を胸に秘めたジャーナリストとして正論を語った。そうしたときはこの人は幕末の水戸の烈士の血を引いているのか、と思う節さえあつた。巻頭にも触れたが、昭和の大戦について蘇峰の見方を色々引用して、東京裁判史観の誤りを私に説いた。私も、プリンストン大学のマリウス・ジャンセンがまだアメリカ占領軍の言語将校だった頃、徳富蘇峰に会いに行き、昭和の大戦で日本帝国がしたことは欧米列強が日本より三十年前にしたことと変りがないと言われて反論できずに終わつた話など、蘇峰に花を添える逸話も伝えた。

ただ九十三歳の今の私には田久保氏が引用した蘇峰の言説を正確に引用する力はない。それでも田久保氏の蘇峰をポジティブにとらえた見方に反論するために私が引用した蘇峰の一文は憶えている。蘇峰徳富猪一郎は昭和二十二年三月十八日に東京裁判宣誓供述書を提出した。これは法廷で採用されなかったが、その供述書で、蘇峰は戦前戦中の日本人の自己認識の誤りを次のように述べている。私はこれは蘇峰の本音であると信ずる。「日本人を咎むれば」というより「徳富蘇峰を咎むれば」と言いたい。

今日に於て日本人を咎むれば、支那を見誤り、米英諸国を見誤り、ソ聯を見誤り、独逸伊太利を見誤り、殊に最も多く日本を見誤り、孫子の所謂る彼を知らず己をしらずして今日の状態に立ち到つた一事であつて、日本人として自業自得……

こう「日本人として自業自得」と述べている以上、徳富蘇峰は日本が誤った戦争をしたと認めていたことに間違いはないと私は思っている。

1 第一にそれでは戦前の儘の旧植民地を維持したかった連合国側としては都合が悪かった。ただ連合国の間でも旧植民地の維持に固執したオランダ・フランス・イギリスとフィリピンに独立を与えようとしていた米国との間には戦前のレジーム維持に対する熱意に違いがあった。それから第二に日本占領を主導した米国としては一九四一年十二月七日に始まった戦争を「太平洋戦争」と呼ばせることによって、もっぱら太平洋地域で日本軍と戦って勝利した米国軍の中心的役割と功績を世界に認定させる意図もあつたことであつたにちがいない。

2 Sukehiro Hirakawa, *Japan's Love-Hate Relationship with the West*, Global Oriental, 2005 が出版された時、『比較文学研究』第八十七号、二〇〇六年、第八十九号、二〇〇七年と英仏日語による三点の書評と一点の私の弁明も出、私はそこで更に三点の英文書評も紹介した。この書評の形をとつた毀誉褒貶の論争の際、拙著の中で E・H Norman 評価を不満として拙著を攻撃したカナダの青年は私の最後の演習に出席した人であつた。当時から平川の歴史解釈に納得していなかったのであろう。

3 降伏交渉中の日本に原爆を投下した米国は極悪非道の悪玉で、ダンテがいま『神曲』を書くならトルーマン大統領は、原爆投下を命じた前非を死ぬ前に悔いないかぎり、地獄で焼かれているはずだ。その罪を帳消しにするために「慰安婦二十万」とか日本側の大虐殺とか誇大に主張する輩もいるが、そうした良心面した連中の赤い舌は必ずや『神曲』未来篇で抜かれるだろう。その地獄でヒトラーはガス室に詰め込まれ、スターリンはさらに下層で氷漬けなのは、それだけ殺した人数が多いからである。

4 習近平も政権の座に就いた当初は米国訪問の際その種の歴史観を主張した。

5 私がこのような記事を『産経新聞』『正論』欄に投稿したとき、同紙の校閲からクレイムがついた。香港もシンガポールも太平洋に面しているから消すように、という注意で、私はこのような注意は校閲に名を借りた検閲ではないかと感じた。

6 清沢は日本のオピニオン・リーダーとして多大な力をふるい日本を大東亜戦争へかりたてた徳富蘇峰を *Dee Hong* として憎んだ。昭和十年代の清沢にとって蘇峰は最も影響力のある言論人であった。歴史家ではなかったであろう。

7 東京帝大の国史科の黒板勝美教授の輝かしい門下生の二人は右の平泉澄と左の羽仁五郎といわれた。私は大学生のころから羽仁五郎は読んだが平泉澄は全く読まなかった。一九六八・九年の大学紛争の時に全共闘系学生の愛読書となった『都市の論理』がベストセラーとなった頃から羽仁をあまり読まなくなった。それに対し二十世紀の十年代から市村真一博士に雑誌『日本』を贈られ、そこに印刷されている平泉論文に目を通すに至って平泉教授が戦時中の日本国史学界の寵児となった所以がよくわかるようになった。しかし私には近代経済学者の市村真一教授が平泉澄に傾倒して生涯変わらなかったことが不思議に思えてならなかった。

8 小堀桂一郎著『和辻哲郎と昭和の悲劇』PHP新書二〇一七年、第一章三。

9 今村均の自伝には『私記・一人六十年の哀歓』、芙蓉書房、昭和四十五年、ほかがある。

10 私が一九五八年ロンドン大学夏期講座で習った英国人女性講師

は若かったが、シンガポール大学に赴任するという。喫茶店に誘って事情を聴くと英国を離れて独立するシンガポールの大学では英国人教員の見通しは暗い。それで若い男性は応募しない、それで自分にポストが廻って来たのだと言った。その女性講師は日本人が嫌いと思えて、私に「東京」と英語で言わせ、二重母音になつていないとさんざ直された。そして「日本人は床の上で寝るそうだな」と教室の石の床を指さしたりした。

11 日本の侵略や植民地支配を認めて謝罪する「談話」を発表する際は、もつと歴史の表裏を見据えた見方を述べてもらいたいものである。とくに根拠薄弱な官房長官談話を発表した河野洋平氏にいたってはその政治的叡智を疑う。

12 国基研には客員研究員としてロナルド・モースも名を連ねていたが、一九七七年当時国務省で日本の新聞を読むという下働きをしていたモースを私はハイン・ペイパー発表の際のディスカサントとして招いた。それが縁で彼はウイルソン・センターに移り、田久保氏がセンターの研究員となった一九七九年、二人は交際することとなったのであった。もつともモースは国務省のフイン部長やプリンストンのジャンセンに嫌われていて長く教授職につくことをえなかった。国基研の客員研究員には本国でも学者としての業績を認められている人を優先して招聘すべきではあるまいか、などと私は思ったものである。

13 田久保氏は二〇二三年十一月二十二日『産経新聞』『正論』欄に『ケネディ暗殺から60年の日米関係』を寄稿した。この最後の記事には氏自身の日米関係が記されている。私は感想をしたためて氏に送った。普通の葉書に書けば氏の目にもふれたであろうが年賀

葉書に書いたものだから残念してしまった。私は氏の記事にあった「（現在の日米関係に）問題があるとすれば、リベラル系米メディアが時たま表面に出す、神道、皇室、靖国神社などを巡り日本の保守派の神経を逆なでする誤解だ」に注目し、同意したのである。

14 小堀桂一郎編『東京裁判 日本 of 弁明』講談社学術文庫、一九九五年、三〇六頁。